

南山大学  
短期大学部英語科 2 年  
大谷 悠花

## 『一人ひとりの「私」が集まる世界』

「あなたは何人ですか。」

このシンプルで当たり前の質問に頭を悩ませるようになったのは、大学生になってからである。

私は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三英傑を輩出し、武士文化で有名な愛知県の中心部名古屋で生まれ育った。生粋の名古屋っ子だが、私の国籍は韓国である。小学校 4 年生の頃、「ひいおじいちゃんとひいおばあちゃんが韓国から来たんだよ。」と母から告げられ、私は初めて自分が日本人ではないことを知った。今まで日本で暮らし、日本語を話してきた私にとってそれは受け入れがたい事実というよりは、実感が沸かず、でも何か重大な秘密を知ってしまったような気持ちになったのを今でも覚えている。確かに、私の生活の節々には韓国の文化が取り入れられていた、と今になって感じる。親戚が集まると韓国料理を食べていたし、挨拶も韓国語でしていた。しかし幼かったのでそれが当たり前だと思っていた。

中学生になり、自分が韓国人である事を意識し始めるようになった。ニュースで日韓関係の悪さを目の当たりにする度に不安になった。中学校 3 年生の公民の授業では、何故日本で生まれ育ち、日本人と変わらない生活を送っている私に、将来参政権がないのかずっと疑問に思っていた。ある日、「韓国人て汚いよね。」と友人が話しかけてきた。その時、“この大きな秘密はこれからずっと胸にしまって隠そう。”と誓った。そんな私の気持ちに変化が起きたのは、高校生になってからである。整形大国としてテレビで取り上げられたり、韓国の歌手や、アイドルグループが日本で大流行するようになった。日本人が韓国のことを好きになってくれて素直に嬉しかった。ある日、私が韓国人だと知った友達が、「羨ましいな。韓国語を教えてほしいな。」と声をかけてくれた。日本人でないことを羨ましがられた経験は初めてであったが、これまで日本人として自分は生きてきたつもりだった為、韓国語は話せない。それどころか、私よりもその友人の方が韓国語や文化をよく知っていた。

私は今、大学で多文化共生の授業を受けながら、違う文化・言葉・人種・宗教・価値観を持つ人々がどうすればお互いを助け合い、尊敬し、共に生きていくことが出来るようになるのかを日々考えている。その中で、20 歳になった今、私は日本人なのか、韓国人なのかを真剣に悩むようになった。法律上は韓国人の為、日本で生きていく上で選挙権のような法的制限はあるが、私のアイデンティティは日本人だと感じている。また、私のような境遇を持つ人は決して珍しい事ではないと分かった。「あなたは何人ですか。」と聞かれると、正直私の答えは「半々。」何人なのかを気にするよりも、どんな人なのかを考える社会にする事が私の理想だ。

南山大学  
短期大学部英語科 2 年  
大谷 悠花

これからの私たちに必要な事は、隣にいる人を“個人”単位で受け止める事だと考える。実際に留学生の友人と話している際に、自分の中にあるその人の国のイメージと、隣で話している友人とは大きく違うと感じた経験をした。大切なのは国民性よりも人間性である。そして、多文化共生を実現できるのは、政府等の大きな機関だけではなく、私達個人の力も含まれる。例えば、愛知県小牧市では「小牧市多文化共生推進プラン」をかかげ、災害時の支援や普段の生活での助け合いを促し、日本人と外国人の双方がその地域で協力して暮らせる様にパンフレットが用意されている。国籍は関係なくその地域に住む人々が関心を寄せ合えば多文化共生への道は大きく開くと感じる。また、私の幼少期の経験の様に、学校教育の影響も大きい。日本語教育に加え、日本人生徒の国際理解を高める授業や行事を、地域を交えながら積極的に取り入れるべきである。「私は関係ない。」という思いを捨て、自他のアイデンティティを尊重し合う事が、多文化共生を実現させるうえで最重要であるし、私自身も実行していきたい。

(1580 字)